

藤田 湘子 第十句集 「神楽」

朝日新聞社 一九九九年十月三十日



夕凍は貧乏くさく庭に来る

この雨に葱は坊主をつくる気ぞ

メーデーやわれは少数そろばん派

冷麦に朱のひとすじの所以かな

水母にもなりたく人も捨てがたく



大根の燦たるものを摺り下す

鶴守のメモ単純な数字のみ

大風の夜が明け雀一番子

大佛殿見ゆる野遊び終りけり

面白くなりさう蜂の飛ぶけふは



ゆくゆくはわが名も消えて春の暮

朝はまづ粒立つ飯や菖蒲の日

両眼のまばたきひとし雲の峰

一本の櫂の嵐金魚売

蝸や死までの扉いくつある



持佛一書架雑多秋深みけり

松過ぎて足袋屋は足袋を作りをり

うみうしに刮目の春与ふべし

干蒲団箱根の谷に叩きをり

もろびとの鼻大寒となりにけり



はくれんの散る舌打と覚えけり

巢立鳥大樹いづれも風あふれ

どこの田も阿蘇のもっこす蛙かな

青天のさびしさ見たる蟹の泡

放浪もさらしくじらもしろじると



枯といふ絶対を待つ雑木山

横浜の狸なりしが轢死せり

少年老いたりはうれん草のうまよいつ

臨済の門を借りたり苗木売

風鈴のひっきりなしも困るなり



瑠璃蜥蜴さみしからずや息合はそ

冷さうめんものがなしくも長々し

日盛を来て面目の立ちにけり

一時間きつちり過ぎぬきりぎりす

闊歩して詩人になろうねこじやらし





会津なり顔にぶつかる赤とんぼ

冬の蜂死んで見せうと死ににけり

一日雀三日雀と来てくれし

うすらひにきぬいと切れしほどの音

我去れば電柱も野に遊ぶらん



たんぽぽが絮となりゆく喪に入るごと

ウエストン祭丸太にゐたる蛾が翔べり

老人は大言壮語すべし夏

じゃがいもの花適当に生きてをる

あめんぼと雨とあめんぼと雨と



冷素麵余生余生と言ふなかれ

焼石に水の千代田区散水車

死蝉をときをり落し蝉しぐれ

ひとつぶの菊のつぼみも飛驒料理

平畑静塔

秋に逝き聖者の額持てる人



枯山の鴉問答相ゆづらず

団栗を拾ひ山へは褒言葉

何欲といふのか木菟になりたしよ

曆売ひっそりと食了へにけり

ふきのたうおしくらまんじゅうしてゐるか



てんとうだましと今日は怠くる日

喇叭水仙田舎の朝の終りけり

暗澹たる時代が曾つて蛞蝓にも

吊る前の生のにほひや走馬燈



草叢を峙のものに盆の月

気を入れて十一月や昼のめし

湯婆の暁のひとはだめでたけれ

冬晴やお陰様にて無位無官



八朔や会津に食うて蕎麦と餅

蝸螂の一文無の行路かな

水槽に鯉がへたと夜長かな

壺愛でて栗名月も近きころ

安曇野の胡桃落しの風小僧

